

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24500706

研究課題名(和文) ダンス活動中の知的障がい者における否定的行動の立ち直り支援について

研究課題名(英文) The study of arecovery from dramatic behavior of persons with mentary handyhandycaped in the midst of play dancing activites.

研究代表者

麻生 和江 (Aso, Kazue)

大分大学・教育福祉科学部・教授

研究者番号：50144803

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、大学生と、知的障がい者のダンスによる交流会を通して、相互理解を図る目的で、13年間継続を元に、交流中に周囲に恐怖、不安、心配等、劇的行動(今行われている流れを中断させるという意味で「否定的行」と称し8名の障がい者を抽出。「複数の学生による観察立ち直り方法についてのし合い 試論 実践」を3年間実施してきた。観察時間は毎年5.6.7.10.11.12.1.月交流会第三土曜日、10:00-12:00、1月発表会、2月発表会終日約10時間(合計約34時間、3時間間では)約102時間、話合い、準備時間合計約90時間であった。成果は、個人差はあるものの、8名に全員に見られた。

研究成果の概要(英文)：This study, healthy subjects and (university students), primarily through exchange meeting by dance ,tugather with persons with mentally handycap, for the aim of achieving mutual understanding, from among which has continued for 13 years, and fear around during the exchange, anxiety, worry, etc., dramatic action to select the eight people with disabilities to take ("negative line" and referred to was. in the sense that disrupt the flow being done now), and discussion of observation righting way by "a plurality of students Essay practice "I've been implementing the three years. Observation time every year 5.6.7.10.11.12.1. Month exchange meeting third Saturday, 10: 00-12: 00 for May recital, February departure (a total of about 14 hours) table meetings all day (about 10 hours), three years, it was about 102hours、mieet time 90hours. Outcomes, although there are individual differences, was seen in all the eight.

研究分野：舞踊教育

キーワード：知的障がい者 ダンス交流会 否定的行動 立ち直り支援 観察 声かけ

## 1. 研究開始当初の背景

本稿は、ボランティア(奉仕活動)ではなく、僅かな身体介助を除き、パートナーシップ(協力関係)、フレンドシップ(友人関係)の視点に立脚するものである。研究進行以上、大学生は『学生』、障がい者は『利用者』と称することとした。障がい者の、ある種特別は行動で、違和感をもたれることがある。それは、時として現れる障がい者の特異な行動の故と考えら「個性」と呼ばれることがある。「障がいの有無に関係なく、個々の存在を認める」という、差別をなくそうとする考えに基付き、障がい者を肯定的に受け入れようとする姿勢が窺える。しかしながらその個性は時として、劇的に周囲の人々を驚愕、不安、悲哀、心配など、不快な感情をまねくことがあることから、筆者は、状況の流れ寸断させる行動であり「否定的行動」と称することとした。したがって個性と称される障がいはすべてがそのまま許されるものではない。更に、本人にとっても、この否定的な行動は、身体不調、精神的な不安定を伴うものであると考えられることから、立ち直り支援の必要性があると考えた。

障がい者について知識がない、あるいは少ない健常者が、否定的な行動をとる知的障がい者の立ち直り支援をすることを前提とした。その理由は、過去の調査から「知的障がい者という名称は知っているが、それ以上は知らない。」「知っているけれど何かを一緒にやったことはない」等の回答が得られた事を根拠とした。知らなくてよいのではなく、知らないけれど、知的障がい者に関する専門用語でなく、今、混乱している知的障がい者には、どのようにして、混乱を解くことができるのか、すなわち「不定的行動」の立ち直り法を検討する必要がある。全ての知的障がい者、筆者が代表を努める、学生さんと利用者さんのダンス交流会から始めることとした。

## 2. 研究の目的

知的障がい者のおける否定的行動をパートナーシップ、フレンドシップの立場に立って立ち直りを支援する方法を考察することを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 本研究の特徴

従来、このような研究は知的障がいの種類や症例別に類型化されて行われることが多い中、本研究では個々に応じた支援法を考察するという方法をとることとした。また、ダンス活動を実践する中で、利用者とともに、健常者である大学生の関わり方と意識変化を随時把握し、それをもとに、次の交流会での対応試作を考案し、試行するという循環的な方法を用いる。筆者らは障がい者と大学生との合同ダンス練習会を1998年より継続している。当初は学生も障がい者も、それぞれ8名程度、小な有志の会であり相互に認知度は低かった。しかしながら現在は障がい者約90名、大学生約50名の大きな人数の会となった。

毎年、5月第3土曜日から、活動開始、8月9月は休み。10、11、12、1月。1回は10:00-12:00の2時間、1月は学生の発表会、2月は障がい者を中心とした発表会(約1時間30分)市内の文化ホールで発表会を開催する。毎時、大学生が若者好みの流行歌(意向『J-pop』と称する)振り付けし、練習する。10月から、発表会に向けてミュージカル要素の強い創作作品の制作に入る。練習場所は、O大学 第3体育館であった。詳細は以下のとおりである。

毎年1回目5月は、6グループに(出席できる学生を鑑みて、学生が前もってグループ編成、その年度は基本的にそのグループで活動)グループ内での自己紹介、準備運動の後、じゃんけん列車を行った後、利用者さんに人気のJ-popをおどる。踊りの振り付けは学生による。はじめての利用者さん、学生、忘れた人のために全体練習のあと、グループ練習をする。

大まかな流れは、以下のとおりである。

2回目以降は利用者の疲労を考え、約30分ごとに約10分の給水休憩をとる。

7月から、新曲とともに創作の話に触れる。

10月からは、利用者さんがよく覚えている曲の振り付け、新曲とともに、創作にとりかかる。創作の題材は、担当の4年生が決め、「オープニング全員、6グループごとのテーマからとった小作品、エンディングじゃ、6グループ-全員という構成になっている。

#### (2)観察項目の設定と対象者の決定

行動観察については表情分析、環境分析、社会心理学部元に13年間継続してきた筆者の体験から、設定した。少尉債は以下の通りである。

-1.表情分析：表情やその変化から、その時の感情を知る方法。表情と感情は密接につながっておりその関連は万国共通であることが知られている。

-2..環境分析：環境心理学は、物理環境、(光環境、音環境、熱環境、混雑具合)が、人健行動にどのような影響を与えるかなどを知るための学問である。

-3.しぐさ分析：人間が、無意識のうちに行う「しぐさ」から、どのような気持ちが隠されているのか、背後にはどのような感情を分析する方法である。

周囲の人々に不安、悲哀、不快、心配など、負の感情をもたらす利用者を8名について、2名以上の学生が活動参加をしながら観察する、参加型観察であり、終了後、観察記録をつけた。観察記録は縦軸に否定性の強い項目から、休憩所で寝転ぶ等の8人を対象とした根拠(否定的行動)は表1に示した。なお、行動観察は参加観察法であり、交流しながらの交流観察であり、筆者は、参加しながら8人を観察対象とした。

毎月の観察時間は約2時間、発表会では約8時間、1年間では34時間、3年間では102時間の観察時間をついやし、1回ごとの8名の行動についての行動の話し合い、否定的行動が見られた場合には、その対処法、立ち直り対策をたて、次回に施行し、その結果をその利用者さんの立ち直り支援法の資料としてまとめ、試論、準備に2~3時間が必要で

あった。毎時、ビデオ、デジタルカメラ撮影をしており、話し合いの資料とした。特に「休憩所で休む」、「グループ活動に入らない」、「ふらつく」、「その場に座り込む」等は、同一の理由に対する観察判断に相違があり、最終的には、筆者によるこれまでの研究から得た経験を元に判断した。筆者はこれらの結果を毎時文章にして記録した。

#### (3)行動観察方法

毎時、観察者と筆者で、否定的行動が現れた利用者による切掛けと、次回への立ち直り支援の工夫を相談した。毎会このように、観察 対処を繰り返した。

観察用紙は、横軸には活動内容、時間進行を配した。時間は大まかであるが、線の起伏で利用者の意識が把握できる。図1に記入例に作成した。参加方観察なので活動後、記録しやすい形式を工夫した。具体的には、以下の通りである。

縦軸に、泣く、グループに入らない・離れる、体調不良になる、勝手な行動をする、大きな声で怒鳴る、休憩所で寝転ぶ、体育館に座って動かない、暴力的になる、ふらつく、急にその場に座り込む、自虐的な行為、不機嫌などの項目、横軸には時間をおって、その日2時間で行った内容をかきこんだ。それは、折れ線グラフのようになり、負の行動をとった切そのようしを掛け、そうなった原因等を、記入する。

#### (4)抽出者の相違

否定的行動者は、以下A・Bの2表に分類される。

表1.A群・過度な指呼表現意欲に由来

友人関係のもつれや自分がこだわっている事象反することがある等、感情的ちょっとした、刺激がある。また、強固な自己表現意欲をもち、それがかなわないと知ると、攻撃的、自傷、大声による喧嘩と全体の進行に停止を招来する「わが。ままの破裂を押しさえられない」利用者。

表 2. B 群. 身体そのものの問題に由来

まじめであるし、ダンス練習は積極的、友好的で、ダンスは好きだが、呼吸が荒くなり、顔色が悪くなる、全身の筋肉が緊張する等、身体的理由によって、継続が困難になることがある利用者である。

A 群には、下記の 4 名が該当する。

O 氏：成人・男子：初めからグループに入らない、ダンスの練習が始まると体調悪そうにして動かなくなる。声かけすると一層かたくなに動かなくなる。様子見て離れると床に頭打ち付ける等の自傷に走る。

S 氏：成人男子：女子学生とは関わるが、他の利用者さんと関わろうとしない。ひとりになることが多い。声かけをすると、気の合う学生ならダンスに入る。人にいじめられたと泣く。特に H 氏と仲が悪く、何らかの接触があると、両者ともに大声を出して走り回って泣き叫ぶ。

R 氏：成人女子：気に入らないことがある、特に S 氏と絡むと、大声で叫び、泣きながら「帰る」と言い出す。気の合う学生が声かけしても、タクシーを呼んでひとりで帰ったことも数回ある。納得するまでメールが届く。

A 氏：成人男子：初めからグループに入らない。気に入らないことがあると、おこりっぽくなる。体育館の外に飛び出ることもある。大きな声で怒鳴る。声に特徴がある。

B 群には、以下 4 名が該当する

N 氏：成人男子：物静かであるが、踊ることも創作すること、特異な動きを考え、鑑賞者を笑わせる。創作ダンスで計算が外れ思惑が外れると、落ち込んで苦しそうに横になる。本来、身体が強くないので、身体的弱さからの由来か思惑の間のずれによる精神的落ち込みかの、区別が困難。

F 氏：青年男子：N 氏と同様おどり、創作ともにまじめで楽しんでいる。しかし本番が近づくと緊張するのか、多汗多飲多尿。目が、うつろになり、身体行動の自立操作が困難に

なることが多い。保護者を呼んでも帰らない。ダンス、舞台への執着は強い。

・K 氏：成年女子：始まりは、テンションが高く、全身で喜びを表しているようである。よい時は、女学生とよく踊っている。気分の変化、疲労で座り込んで泣き出し、再起不能となる。帰りのバスにも乗りたがらない。

・M 氏：成年女子：おしゃれが好きで、毎回学生に見せて回る。症状としては、上記 K 氏と同様。出番が来ると、無意識的に舞台上がる。

#### 4. 研究成果

立ち直り支援は、多少の相違はあるものの、8 人に全員見られた。

O 氏は、24 年 6 月から、交流会の始めと終わりの「ご挨拶」を流暢におこなう。また、音響機材の操作に興味があり、25 年 1 月から、筆者用の腰に巻くスピーカー付きマイクを装着すると一層張り切るようになった。踊りも好きな曲だけおどるようになった。大きな会場でのアナウンスやご挨拶もできるようになった。

A 氏は、気分のむらがあったが、機械操作を任された 25 年 6 月から、O 氏に近づくようになった。そこで、グループのなかで、音響再生デッキを運ぶ役割を引き受けた時から、時々グループから逸脱するものの、グループ活動をすることがおおくなった。

S 氏は、H 氏が、参加できなくなったこともあり、ひとりになることが少なく、なくことも少なくなり、笑顔が、多くなった。

H 氏は、相性のよくない S 氏に近づけないようぜんいんで、配慮したけっか、否定的な行動は減少した。気の合う大学生がいなくても、女子が迎えに行くとグループに戻るようになった。不機嫌になったときに、その理由を筆者に話してくれるようになった。残念ながら 26 年 7 月から体調を崩し、交流会の状況を聞くメールはくれるものの、参加はできない状況になった。「ダンスはすごい好きだ

けど体調が悪くて、参加できそうにない。」とのこと。

N氏は、気の合う大学生が25年に卒業したので、落ち込み気味であった。それがよい切掛けだったのか、一層物静かになったが、常に人と違うことを行い、創作に専念するようになった。体調が悪いときは、自分から、休憩所に行き、水分補給した後、少々休憩して、グループもどる。

F氏は、水の多飲・多汗であったが25年5月イオン飲料を持参すよう促した。6月からは持参するようになった。体調がおかしくなる兆しを感じ休憩を促すと、素直に、休憩するようになり、ダンスにもいっそう専念できるようになったようである。

K氏は、欠席が多く、それだけに、一回一回の始まりはテンションが高く、1時間を過ぎると座り込んでしまうことが多かった。始まりのテンションを押さえようと、大学生は声かけ、背中を軽くなぜたり、背中を「軽くとんとん」したりと、試みたが、ほとんどこころはなかった。ただ、終わって解散間際にくせいがついて、泣き崩れて不動になってしまうことはなくなった。

M氏は、踊りたいけれど、ダンスに集中できないところがないようである。25年10月から、M氏は、ダンスしたい気持ちはあるが、覚えられないので、ダンス練習ではM氏持参のグッズを学生が振り回して、自己表現をしようとしている。それは、大変危険なことであり、抑制したが止めようとしなかった。大学生3人がついて、安全確保をはかった。また、同時に、休憩場所にいることがすくなくなった。ダンス、仲間との活動に興味が高まった故の行動とも考えられるが、筆者には前進と後退が、両存したか形となったと結論づけた。

否定的行動の立ち直り支はいた援は時間がかかる。「見守り」「声かけ」「ハイタッチ程度の身体接触」に対する変化の様子を、細か

くとらえていく必要がある。私たちの友人であり、仲間である知的障がい者ひとりひとりについて、「なぜ、否定的な行動をとるのか」考えていくこと、そういう疑問を持つことは、ノーマリゼーションへ浸透に不可欠である。

ただし筆者の立場、すなわち、知的障がいについて、知識のないわたしたちは、専門家になるのであれば、家庭内の事情、利用者が持っている障がい名、日頃の障がいの状況などに、不用意に、また、積極的に触れることは、してはいけないことだと考えている。

#### 参考文献

- 1)麻生和江(2005) 知的障がい者と健常者の合同ダンス活動における両者の「からだ」への意識変容について 平成15年度、16年度科学研究費補助金(基板研究C(2)) 研究成果報告書 研究課題番号 15500417 Pp.51
- 2)麻生和江(2008) 知的障がい者のための映像を用いたダンスプログラムの開発 平成18年度19年度科学研究補助金(基板研究C(2)) 研究課題番号 18500467 Pp.44
- 3)麻生和江他(2010) 知的障がい者に関する健常者の認識の現状～おおいの国体式典歓迎演技の出演者の場合～ 日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門舞踊研究会 舞踊教育学研究 第12号 pp.32～41.
- 4)麻生和江 他(2010)「触れあう」実習について—身体表現の授業実践より— 研究論文集 - 教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集 - 第4巻1号 九州地区国立大学間の連携に係る企画委員会リポトリ部会
- 5)大阪ガス行動観察研究所(2014) 行動観察 <http://www.kansatsu.jp/observation/investigate.html>
- 6)大阪ガス行動観察研究所(2012) 行動観察

とは <http://www.kansatsu.jp/observation/method/index.html>

7)レイモンド・G・ミルテンバーガー(園山/野呂/渡部/大石 訳)(2006) 行動変容法入門 二瓶社 Pp.488.

8) 草野/西/長曾我部/岩岡(2007)インクルーシブ体育の創造 市村出版 Pp.124.

9)特別支援教育からインクルーシブ教育へ 日本教職員組合障害児教育部指導編

10)渋谷昌三(2008)しぐさを見れば心の9割がわかる! 三笠書房 Pp.190

5. 主な発表論文等(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

発表(代表者)麻生和江、知的がい害者と大学生との共同によるダンス活動における学生参加者について、日本教育大学協会保健体育・保健研究部第34回全国創作舞踊研究発表会、平成27年2月7日、筑波大学(茨城県つくば市)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

麻生和江(Aso Kzue)

大分大学・教育福祉科学部・教授

研究者番号: 50144803

(2)研究分担者 ( 0 )

研究者番号:

(3)連携研究者 ( 0 )

研究者番号: